# 2026_0730「積乱雲の降雨帯」日々の理科 4372 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

横浜の高層ビルから丹沢方面を望むと、山並みの上に大きく発達した積乱雲が広がり、その直下から白く垂れ下がる帯状の降水域がはっきりと確認できます。積乱雲の雲底、いわゆる「根」の部分から雨が筋状に地上まで達している様子が写っており、上空だけで雨が蒸発する「尾流雲（ビルガ）」ではなく、実際に強い雨が降っていることを示しています。遠くからでも降雨域が青白く霞み、周囲の山並みが雨のカーテンに包まれて見えることから、この局地的な豪雨の規模の大きさが伝わってきます。夏の午後に典型的な積乱雲の成熟期をとらえた一枚といえるでしょう。

このような積乱雲では、激しい雨粒や雹が周囲の空気を引きずりながら落下することで、強い下降気流が生じます。下降した冷たい空気は地表付近で四方へ広がり、突風を伴うダウンバーストを引き起こすことがあります。写真の降雨帯の濃さから考えると、現地では非常に強い下降気流が発生していた可能性が高く、短時間に気温が数℃以上急降下し、猛烈な雨とともに突風が吹き荒れていたことが推測されます。積乱雲は見た目の迫力だけでなく、雷や突風、局地的な豪雨など多様な気象災害をもたらすため、遠くから観察していてもその発達状況を読み取ることは、防災の観点からも重要な意味を持っています。

この写真は、都市部から離れた山地で起きている激しい対流活動を、遠望によって立体的に観察できる貴重な記録でもあります。横浜から数十キロ離れた丹沢方面では、地形による上昇気流が積乱雲の発達を後押しし、局地的な豪雨をもたらしたのでしょう。一方、撮影地点ではまだ雨が降っていなくても、遠方ではすでに激しい降雨が始まっていることが一目で分かり、積乱雲の内部で起こる大気のダイナミックな循環を実感できます。山地に降り注ぐ雨の柱と、それを支える巨大な積乱雲の姿は、夏の大気が秘めるエネルギーの大きさを雄弁に物語っています。

（2026 年 7 月下旬／横浜市）